

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo.35（2016年3月号）◆

桜の花が咲き始めたものの、花冷えの寒さが続いておりますが、皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。さて、2016年1月、20世紀メディア研究会は100回目の例会を迎えることとなりました。2001年10月27日に第1回研究会を開催したのを皮切りに、夏・冬休みや入試の時期など一部を除いて毎月実施してまいりました。研究会には、ざっと見積もって、のべ2000人から3000人の方々に足をお運びいただいたのではないかと思っております。こうして100回研究会を迎えることができましたのも、ひとえに皆さまからいただきましたお力添えの賜でございます。ここに厚くお礼申し上げます。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

**【ブログ用エッセイ募集】** 会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いておりますでしょうか。最近では吉田則昭先生、加藤哲郎先生に相次いで研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

**【第100回研究会】（1月30日（土）午後2時30分～6時00分）**

20世紀メディア研究会の記念すべき100回目には、山本武利氏、川崎賢子氏、土屋礼子氏、加藤哲郎氏にご登壇いただきました。

◇挨拶

・山本武利（NPO法人インテリジェンス研究所）

「データベース利用者に求める初歩的『エケチット』」

草創期のプランゲ文庫の状況や資料探索の苦労などをご紹介いただき、プランゲ文庫のさらなる可能性について、お話をいただきました。

◇研究発表

・川崎賢子（日本映画大学教授）

「李香蘭研究の新視角--証言と資料の再読から」

証言や資料の再読によって、いかに李香蘭という人物の奥行と研究対象としての面白さを引き出すことができるのかを、あらためて感じ入ることのできるご報告でした。

・土屋礼子（早稲田大学政治経済学術院教授）

「占領軍通訳翻訳部（ATIS）とG-2歴史課」

ATISとG-2歴史課は、占領期研究ではたびたび言及されるものの、その実態については、ほとんど明らかになっていない。本報告は、こうした未開拓な領域に分け入り、両セクションの全貌を解明しようとするものであった。

・加藤哲郎（早稲田大学大学院政治学研究科客員教授・一橋大学名誉教授）

「シベリア抑留とプリンス近衛文隆の死―『異国の丘』『夢顔さん』の実像」

現代史は、謎に包まれているといっても過言ではない。本報告は、近衛文隆の死をめぐる「謎解き」を行ったものであった。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。

<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●第 101 回研究会は、3 月 26 日に実施されました。ご登壇いただきました金子彩里香氏、宮杉浩泰氏、西野厚志氏のご報告につきましては、次回ニュース・レターにてご紹介させていただきます。

新年度の 20 世紀メディア研究会は、4 月 30 日（土）、6 月 4 日（土）、7 月 2 日（土）に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20 世紀メディア研究所事務所 [m20th@list.waseda.jp](mailto:m20th@list.waseda.jp) まで、メールにてご一報下さい。

### 【気になる新著紹介】

土佐弘之『境界と暴力の政治学 一安全保障国家の論理を超えて一』岩波書店、栗原彬ほか編、『ひとびとの精神史 第 7 巻 終焉する昭和—1980 年代—』岩波書店、有田伸『就業機会と報酬格差の社会学—非正規雇用・社会階層の日韓比較』東京大学出版会、河村俊太郎『東京帝国大学図書館—図書館システムと蔵書・部局・教員』東京大学出版会、園田茂人編、『チャイナ・リスクといかに向きあうか—日韓台の企業の挑戦』東京大学出版会、石川亮太著『近代アジア市場と朝鮮—開港・華商・帝国』名古屋大学出版会、三浦英之『五色の虹—満州建国大学卒業生たちの戦後』集英社

### 【コラム：ワシントン DC 再訪と米経済のゆくえ？】

ちょうど 1 年前の同欄で、アメリカ経済の印象について記した。それは、NARA での調査の際に訪れたワシントン DC での印象をもとにした経済分析(?)であった。今回、ふたたびワシントン DC を訪問したが、前回とはいささか違った様相を目撃した。

2015 年 2 月のワシントン DC では、地下鉄が延伸され、郊外を中心に、高層マンションや商業ビルの建設に湧く状況を目の当たりにした。また、大型ショッピング・センターでは、手にショッピング・バッグを抱えた多くの人々が、せわしなく行き交っていた。だが、2016 年 2 月のワシントン DC では、1 年前に感じたようなショッピング・センターでの熱気は感じられなかった。なかでも、2015 年と 16 年の違いとしてもっとも印象に残ったことは、郊外や中心部にかかわらず、あちこちに「rent」の文字が見られ、テナントに空きが目立っていたことである。これには二つの可能性を指摘できる。

一つは、アメリカ経済が好調のため、不動産価格が上昇し、それにあわせて賃貸料が高騰したため、テナントが契約を見送り、撤退したこと。もう一つは、アメリカ経済に不景気の波がじわりと押し寄せており、テナントが撤退を余儀なくされた可能性である。

米連邦準備制度理事会 (FRB) は利上げを実施したものの、年始からの株価下落や中国経済の先行き不透明感から、追加利上げが見えにくくなっている。いったいアメリカ経済は、問題なく推移しており、力強さは失われていないのか。それとも、リセッションの局面に入りつつあるのか。昨年のワシントン DC 訪問の際には、アメリカ経済の力強さを存分に感じたが、今回の訪問では、力強さに対する懐疑の念を抱いてしまった。よくわからなくなったというのが、率直な印象である。

今後、発表される経済指標などを注視しながら、アメリカ経済のゆくえをフォローしていく必要があるのは言うまでもない。それは、アベノミクスの動向だけでなく、参議院選挙など日本政治にも大きな影響を与える要因となるのだから。

[3 月 28 日付 文責：小林聡明]